

クリニックラウン派遣事業報告書

2008年度



特定非営利活動法人 日本クリニックラウン協会

クリニックラウン派遣事業 報告書

～病院で闘病生活を送るこどもをクリニックラウンが訪問し、
こどもの成長をサポートします～

◆事業目的

闘病生活を送るこどもの権利を尊重し、病院専門のクラウン（クリニックラウン）を派遣することにより、病気のこども達を癒し、こどもらしく健やかに生活できる環境をつくる。

◆事業目標

入院しているこども達に、クリニックラウン（臨床道化師）派遣事業を行うことにより、クリニックラウンと関わることによって、こどもが気分転換やストレス解消を図り、こどもらしく生活できる状態とする。



◆クリニックラウンの訪問日スケジュール（※日大病院の場合）

- 12：30 病院の近くで待ち合わせ、クリニックラウン同士の情報交換をおこなう
- 13：45 病院入り
- 14：00～15：00 準備・更衣、カンファレンス（医療スタッフとの打合わせ）
- 15：00～17：00 病棟訪問（訪問時間は、およそ2時間）
- 17：00～17：30 訪問後、カンファレンス

- ・訪問前には必ず担当者とカンファレンスを実施。こどもの心理的、身体的な状況の確認や感染症対策の為、訪問する部屋の順番やマスク着用の有無などを確認する。
- ・訪問後、報告書を事務局に提出。



◆事業効果（総括）

関東におけるクリニックラウン活動の定着を図るため、2006年度より日本大学附属板橋病院と東京慈恵会医科大学附属病院の2病院にクリニックラウンの派遣を行ってきた。2008年度は、日本大学附属板橋病院と東京慈恵会医科大学附属病院の2病院に加え、東京医科歯科大学附属病院と東京都立清瀬小児病院にも各年4回ずつ訪問を行なった。

2006年度から2007、2008年度と3年間継続して、本助成金で関東でのクリニックラウンの派遣実績を重ねることで、関東圏の病院におけるクリニックラウンの派遣活動が定着した。

本助成金により、関東2病院への派遣が実現し、継続できたことがこの3年の大きな成果である。関東での派遣を継続実施できたことで、関西に事務局を置く協会ではあるが、関東にもクリニックラウンの派遣が可能だと周知することができた。その結果、関東圏の病院へのクリニックラウンの派遣が拡充。東京だけでなく、茨城県（茨城県立こども病院）、千葉県（千葉県こども病院）、静岡県（静岡県立こども病院）にてクリニックラウンの派遣を行なった。2008年度は、全国13箇所にてクリニックラウンの派遣を実施した。



※特記事項

- ・派遣されるクリニックラウンは、健康診断を受け、既往歴証明書と共に病院に診断書を提出している。病院での活動であるため、健康管理は欠かせない。
- ・2008年度はクリニックラウン従事者を対象に専門性の向上を目指し、研修を実施。コーチングや教育学、身体表現、児童文学の研究者、小児医療の第一線で活躍しているなど幅広い分野の方々から、クリニックラウンがこどものQOLを高めるために必要なスキルと療育環境改善のための有効な支援策について論理的に学んだ。

あ



◆活動の様子

① カンファレンス

「こどもの症状だけにクローズアップするのではなく、こどもの対人的な傾向や、最近の関心事についても念入りに確認する」

あ



② 病棟訪問の様子

「クリニックラウンは、病棟にいるすべての人に関わりながら、こどもとの関係性を築いていく。」



③病棟訪問の様子



「ICU（集中治療室）やNICU（新生児集中治療室）などの外部からの訪問が困難な病棟での活動も広がる。外部からの刺激が少ないため、クリニックラウンの訪問はこどもたちのアクティブな反応を引き出すという面だけでなく、付き添いの保護者に対する緊張の緩和やストレスの軽減などの効果が上がっている。」

「病室への入室に際し、感染症対策のため、マスク着用は必須である。特に、冬季は全病棟マスク着用になる。その分アイコンタクトが重要な役目をもっている」

◆医療スタッフの声

日本大学医学部附属板橋病院 小児科 病棟医長 陳基明

クリニクラウンの方々に、日本大学医学部附属板橋病院小児病棟へ 2006 年 6 月から訪問していただくようになってから、約 2 年間が経過しました。当初、私は、「クリニクラウン」という言葉は知っていましたが、実際、病棟内でどのような活動をするのだろうと、私を含め保育士や看護師は、期待半分、心配半分でした。しかし、この心配は、私たちの取り越し苦労に終わり、初回からクリニクラウンの訪問を受けた子供達は、眼を輝かせ、笑顔で楽しんでいました。

「笑い」は、周囲を和ませたり、笑っている本人は、安らぎとか安心を感じたりします。笑いでリラックスすると自律神経の働きが安定して、血中酸素濃度も増加するため、ストレスを大幅に減少させることができるそうです。また、大脳辺縁系を刺激し、 β （ベータ）エンドルフィン（内因性モルヒネ様物質で、脳内ホルモンとか幸福ホルモンとも呼ばれている）の分泌が促進されます。また、リンパ球の増加により免疫能の上昇などがみられると言われております。しかも、笑いは、A-10 神経（快感神経）を刺激し、脳波で α 波が増え、情緒が安定し感情が豊かにする作用もあります。笑いでストレスを発散し、ときめき、感動することで NK（ナチュラルキラー）細胞というリンパ球に影響し免疫力を高め、細菌・ウィルス・がん細胞を排除するという医学的な効果に関しても証明されています。このように「笑い」は、医学的に、さまざまな良い作用がヒトに起こるようです。

長期に入院している小児がんの患児達は、病気によっては、6 か月から 1 2 か月間も入院し、苦い薬の内服や 吐き気のある薬の点滴を受けるなどのつらい治療を受けています。1 歳前後の小さい乳幼児達は、クリニクラウンの突然の訪問を受けると急に泣き出してしまふ事がありますが、慣れてくると笑顔を見せてくれたりします。子供達は、我々、大人とは異なって、素直で正直なので、嬉しいときは笑顔を見せてくれ、嫌なときは、不機嫌になり、泣き顔になったりします。長期に入院している患児で、病室をクリニクラウンが訪問した後も、病室から楽しそうな顔をだしてクリニクラウンの姿を追っている光景を良く見かけます。

長期に付き添いをしているお母さんもクリニクラウンから笑いをもらい、自分達の子供がニコニコしている笑顔を見ると心が和み、疲れも吹き飛んでしまうのではないかと思います。患児の笑顔や付き添っているお母さん達の笑顔を見かけると、我々、医療スタッフも大学病院での常に緊張している医療の中で、ほっと、一息をつける瞬間があり、お互いのコミュニケーションも良好になり良い関係を保てるようになると思います。



◆クリニックラウンの声

生まれた我が子とNICUで初面会の日。お母さんは外国の方でした。日本語は少しだけ、どれだけの不安を抱えてここまで来た事でしょう。僕達が病室前で入念な衛生チェックをして、NICUの入り口で手洗い、消毒をしているとき、その御夫婦にお会いしました。ほほえみながら手を振るとポカンとされていました。入室するとその御夫婦がいました。そこへ行き、赤ちゃんへ音を使ったクラウニングを行うと、ちいさな体が反応しているのにお母さんはびっくり、旦那さんと皆で顔を見合わせて喜び合っていました。

処置が始まりその場を離れようとしたとき、赤ちゃんが泣き出したので、少しでも和らぐようにオルゴールを奏でたその時。泣き声がぴたりと止んだのです。「おぼえてくれたんだね、ありがとう」オルゴールの曲が、おなかの中にいる時に、良く聴かせていた曲だったそうです。その反応に母子のつながりを強く感じたようで大変喜ばれていました。

母親の緊張や不安は赤ちゃんへも伝わるので、クリニックラウンはその緊張や不安を和らげます。そして、ちいさな体で一生涯懸命生きている赤ちゃんへ、クリニックラウンの出来る最善を尽くします。これからも全力でサポートしていきます。

◆クリニックラウンの目指すもの

ともにいきる・・・それは私たちクリニックラウンが目指す、人と人のあるべき姿です。私たちクリニックラウン（臨床道化師）は、入院しているこどもがこども本来の生きる力を取り戻し、笑顔になれる環境づくりのためにクリニックラウンを日本各地の小児病棟に派遣しています。

活動が始まった当初は、日本における道化師文化の脆弱さから、医療現場で道化師が果たす役割があるのだろうかという病棟訪問そのものに対する疑問の声も少なからずありました。ただ、私たちはその答えを当事者である入院しているこどもや、長い闘病生活を支える家族、そして献身的なケアを続ける医療スタッフに問うことにしました。

結果は、私たちが想定した以上に、今日の医療現場には笑いやユーモアそして心の通ったヒューマニティーが必要とされていたのです。確かにクリニックラウンが病棟を訪問する以前は、道化師が集中治療室やターミナルケア（終末期医療）のこどもとベッドサイドで遊んだり、楽しくコミュニケーションをとることは難しいといわれていました。しかし、実際に、私たちが活動を始めると多くの方が、入院しているこどもの療育環境に深い関心を示し、個人や組織、企業といった様々な枠組みを超えて支援の輪が広がりました。

そして、現在では少しずつではありますが、派遣先も増え、こうしている今もどこかの病院にはクリニックラウンとこどもの微笑ましいハーモニーが育まれているのです。ともにいきる、共育的な関係性の実現にむけてこれから私たちが考えていかななくてはならないことは、既成概念にとらわれず、あくまでその活動を必要とする当事者の声を具体的な形にしていくことだと思います。私たちクリニックラウンは、これからも入院しているこどもの声なき声を良く捉え、安心して成長・発達できる社会づくりに貢献したいと考えています。

（事務局長兼アーティスティックディレクター 塚原成幸）

◆日本クリニックラウン協会の活動

●クリニックラウンの養成

オランダのクリニックラウン財団の協力を得て、クリニックラウンを養成・認定します。こどもとのコミュニケーションや児童の心理、保健衛生などに精通したスペシャリストである臨床道化師を育成します。

●クリニックラウンの派遣

日本の病院で長期入院するこどもたちから「笑顔」を引き出すために、クリニックラウンを病院へ派遣します。

●啓発・ネットワーク活動

広く一般の皆さんにも、クリニックラウンの存在を知ってもらうために、講演会や活動報告会などのイベントの開催などを行います。



「この事業は競艇の交付金による日本財団の助成金を受けて実施しました」

特定非営利活動法人 日本クリニックラウン協会 事務局

〒552-0021 大阪市港区築港 2-8-24 piaNPO 401-d

Tel: 06-6575-5592 Fax: 06-6575-5593

E-mail: info@cliniclowns.jp <http://www.cliniclowns.jp>